

各関係機関長 殿

岡山県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

平成22年度病害虫発生予報第4号

平成22年7月1日
岡山県

予報概評

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水 稻	葉いもち	—	やや多
	穂いもち	並	並
	紋枯病	並	並
	ヒメトビウンカ	—	並
	縞葉枯病	—	やや多
	ツマグロヨコバイ	—	並
	萎縮病	—	並
	ニカメイガ	—	並
	セジロウンカ	—	やや多
	トビイロウンカ	並	並
斑点米カメムシ類	—	やや少	
モ モ	せん孔細菌病	—	少
	灰星病	やや遅	並
	モモハモグリガ	やや遅	やや多
	ナシヒメシンクイ	—	並
	ハダニ類	—	やや多
ブドウ	晩腐病	—	並
	べと病	並	並
	うどんこ病	—	並
	フタテンヒメヨコバイ	—	並
	チャノコカクモンハマキ	並	並
果樹共通	カメムシ類	—	多
キュウリ	べと病	—	やや多
	うどんこ病	—	やや多
	褐斑病	—	並
	炭疽病	—	やや少
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	並
トマト	疫病	—	やや多
	葉かび病	—	やや少
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病	—	やや多
	キスジノミハムシ	—	並
	コナガ	—	やや少
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	並
	アブラムシ類	—	やや多
	モザイク病	—	並
キ ク	白さび病	—	並
	ハダニ類	—	並
	アブラムシ類	—	並

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月21～22日の巡回調査によると、本田での葉いもちの発生圃場率は3.3%で
 平年(1.7%)よりやや高かった。葉いもちの初発生時期は平年(6月5半旬)
 並であった。

イ. 巡回調査において、葉いもちが発生した苗を本田に植え込んでいる事例が中部
 ～南部地帯で散見された。

ウ. BLASTAM-メッシュ岡山版(以下、ブラスタム)による葉いもちの感染好適
 条件が、6月18日、19日、26日、28日および29日に北部・中部地帯で広域的に出現した。これらの地域でいもち病対象薬剤の箱処理を実施していない圃場や残効
 が切れている圃場では、6月6半旬～7月2半旬に広域的に初発生する可能性がある。ブラスタムの最新結果は下表のとおりである。

エ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並と
 されており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤をしていない圃場では、発生を確認後は速やかに防除を行う。箱処理
 剤を使用している圃場では、箱処理剤と同系統の薬剤を避ける。

ウ. 耐病性の弱い品種(コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日)が広く作
 付けされている。現時点で未発生圃場でもこれらの品種では初発後の病勢の進展
 が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長される。梅雨時期であるため、今後
 の気象変動に注意する。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況

(BLASTAMメッシュ岡山版)

地帯区分	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上 長 田	千 屋	奈 義	古 町	新 見	久 世	津 山	福 渡	和 気	高 梁	岡 山	虫 明	倉 敷	笠 岡	玉 野
6. 15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—
16	△	△	—	—	△	●	—	—	●	—	—	●	●	—	●
17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	—	—	●	—	—	●	●	●	●	●	—	—	—	●	—
19	—	△	●	●	●	●	●	●	●	●	—	●	●	—	—
20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	—	—	—	—	—	—	—	●	●	—	△	●	●	—	●
22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
23	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	●	●	●	●
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	—	—	—
25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26	●	—	●	●	—	—	●	●	●	●	—	●	●	—	●
27	●	—	—	—	—	—	—	—	—	—	●	●	●	—	●
28	●	●	●	●	●	●	●	●	—	●	—	●	●	●	—
29	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	—	—	●	●	—

●：感染好適条件 △：準感染好適条件 —：いもち病発生の好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち（極早生種対象）

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 極早生種の生育はほぼ平年並である。

イ. 6月21～22日の巡回調査では、県北部、中部における極早生種に葉いもちの発生は認めていない。

ウ. ブラスタムによると、葉いもちが6月6半旬～7月2半旬に広域的に初発生する可能性がある（前述）。

エ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長される。梅雨時期であるため、今後の気象変動に注意する。

(3) 紋枯病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月21～22日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。

イ. イネの茎数は早生種を中心に概ね平年並である。

ウ. 前年の発生は平年並であったため、越冬菌密度も平年並と考えられる。

エ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

(4) ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容

ヒメトビウンカ（第2世代幼虫）

発生量 並

縞葉枯病

発生量 やや多

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初飛来は6月14日で平年（6月13日）並、6月1～5半旬の飛来数は10頭で平年（8.8頭）並であった。

イ. 6月下旬の県予察圃場におけるすくい取り調査によると、ヒメトビウンカ成幼虫の発生量は19頭で平年（12.4頭）よりやや多かった。

ウ. 6月21～22日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）によると、発生圃場率は33.3%で平年（46.8%）よりやや低く、成幼虫の発生量は1.1頭で平年（1.5頭）並であった。

エ. 縞葉枯病については、媒介虫であるヒメトビウンカの保毒虫率が平年より高いことから、発生はやや多いと予想される。

オ. 平成22年度植物防疫情報第2号参照。

(5) ツマグロヨコバイと萎縮病

予報内容

ツマグロヨコバイ（第2世代幼虫）

発生量 並

萎縮病

発生量 並

- ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初飛来は6月9日で平年（6月5日）よりやや遅く、6月1～5半旬の飛来数は54頭で、平年（269.0頭）より少なかった。
- イ. 6月下旬の県予察圃場におけるすくい取り調査では、ツマグロヨコバイ成虫数は40頭で平年（58.9頭）よりやや少なく、幼虫の発生は認められなかった（平年4.8頭）。
- ウ. 6月21～22日の巡回調査における見取り・払い落としによる発生圃場率は10.0%で平年（5.0%）より高かった。
- エ. 6月21～22日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）では、成幼虫の発生量は0.1頭（平年0.4頭）で少なかった。
- オ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。
- カ. 萎縮病は平年同様発生を認めていない。

(6) ニカメイガ（第1世代幼虫）

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて、平年同様6月5半旬までに誘殺を認めていない。

(7) セジロウンカ

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 赤磐市の予察灯における初飛来は5月23日で、平年（6月17日）より早く、6月4半旬～5半旬にまとまった飛来を認めた。6月1～5半旬の飛来数は74頭で平年（9.6頭）より多かった。
- イ. 6月21～22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査によると、発生圃場率は23.3%で平年（3.4%）より高かった。
- ウ. 6月21～22日の巡回調査におけるすくい取り調査（20回振り）では、成虫の発生量は4.1頭で平年（0.3頭）より多かった。
- エ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において、平年同様6月5半旬までに飛来を認めていない。
- イ. 6月21～22日の巡回調査において発生を認めていない。

(9) 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の飛来数は、31頭で平年（51.3頭）より少なかった。
- イ. 6月21～22日の巡回調査によると、県北部イネ科牧草地のすくい取り調査（20回振り）では、アカスジカスミカメの発生量は1地点当たり7.9頭で平年（22.4頭）より少なかった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く降水量は平年並とさ

れており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

2 果 樹

(モ モ)

(1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 6月18日の巡回調査によると、発生圃場率は10.3%で、平年(24.8%)より少なかった。

イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 風雨によって発病が助長されるので、今後の気象に注意する。

(2) 灰星病

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月18日の巡回調査では、一般圃場において果実での発生は認めていない。

イ. 県予察圃場における幼果の発病果率は12.7%で、平年(6.8%)より高かった。

ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生時期 やや遅

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける第2世代成虫の初飛来は、6月12日頃で平年(6月10日)並であった。

イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は480頭で平年(117.1頭)より多かった。

ウ. 6月18、21～22日の巡回調査では発生を認めなかった(平年発生圃場率2.5%)。

エ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は3頭で、平年(20.4頭)より少なかった。

イ. 6月18、21～22日の巡回調査における新梢被害の発生圃場率は18.9%で、平年(21.7%)並であった。被害程度は軽微であった。

ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 6月18、21～22日の巡回調査によると、被害発生圃場率は18.9%で平成(12.1%)よりやや高かった。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平成より高く降水量は平成並とされており、本虫の増殖をやや助長する条件である。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月の降水量は全般的に平成並であったことから、幼果の感染も平成並と考えられる。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(2) ベと病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(マスカットベリーA)における初発生は6月8日で平成(6月6日)並であった。
- イ. 6月18日の巡回調査では、一般圃場のトンネル被覆栽培において平成同様発生を認めていない。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性があるので注意する。

(3) うどんこ病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月18日の巡回調査において、トンネル被覆栽培の一部の圃場で発生を認めた。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平成より高く、降水量は平成並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(4) フタテンヒメヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月18、21～22日の巡回調査において発生を認めなかった(発生圃場率の平成値は1.2%)。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平成より高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(5) チャノコカクモンハマキ(第2世代幼虫)

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

- ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は6頭で、平成(6.8頭)並であった。

- イ. 6月18、21～22日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高いとされており、本虫の増殖を助長する条件である。

(果樹共通)

(1) カメムシ類 (チャバネアオカメムシ)

予報内容

発生量 多

予報の根拠

- ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は278頭で平年(59.6頭)より多い。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高いとされており、夜温が高いと本虫の飛来が活発化する。
- ウ. 平成22年度病害虫発生予察注意報第1号参照。

3. 野菜

(キュウリ)

(1) ベと病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(5月12日播種)においては発生を認めていない。
- イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率は70.6%で、過去10年間で最も高かった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(2) うどんこ病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(5月12日播種)における初発生は6月28日で平年(6月21日)より遅く、発生量はやや少なかった。
- イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率は70.6%で、過去10年間で最も高かった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(3) 褐斑病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(5月12日播種)においては発生を認めていない。
- イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率は17.6%と過去10年間で3番目に低かった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発病をやや助長する条件である。

(4) 炭疽病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(5月12日播種)においては発生を認めていない。
- イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率は5.9%と過去10年間で3番目に低かった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発病を助長する条件ではない。

(キュウリ、ナス)

(1) ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月24～25日の巡回調査によると、露地および施設栽培のナスでの発生量は平年並、キュウリでの発生量は平年よりやや少なかった。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

(トマト)

(1) 疫病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(5月12日定植)においては発生を認めていない。
- イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率は7.1%で、過去10年間で最も高かった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発生を助長する条件ではない。

(2) 葉かび病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 県予察圃場(5月12日定植)においては発生を認めていない。
- イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率は28.1%で、過去10年間で4番目に低かった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発生を助長する条件ではない。

(アブラナ科野菜)

(1) ダイコン軟腐病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発生をやや助長する条件である。

(2) キスジノミハムシ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発生を助長する条件ではない。

(3) コナガ

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

- ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は18頭で、平年（53.2頭）より少なかった。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発生をやや抑制する条件である。

（野菜共通）

（1）ハスモンヨトウ

予報内容

発生時期 並
発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）のフェロモントラップへの誘殺数は24頭で、平年（57.5頭）よりやや少なかった。
- イ. 6月24～25日の巡回調査では、一般圃場での発生は認められなかった。
- ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

（2）アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容

発生量 アブラムシ類 やや多
モザイク病 並

予報の根拠

- ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）の黄色水盤への飛来数は340頭で、平年（270頭）よりやや多かった。
- イ. 県予察圃場（赤磐市）におけるアブラムシ類の6月下旬のキュウリ、トマトでの発生は平年より多かった。モザイク病は平年よりやや少なかった。
- ウ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場でのアブラムシ類の発生圃場率は、キュウリでは平年並、トマトでは平年より高かった。発生量は平年並であった。モザイク病の発生圃場率は、キュウリでは0%で過去8年間で最も低く、トマトでは7.1%で平年並（過去10年間で4番目に低い）であった。
- エ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、アブラムシ類の発生をやや助長する条件である。

防除上の参考事項

- ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除を行う。

4. 花 き

（キ ク）

（1）白さび病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生ほ場率量は28.6%で、平年並（過去10年間で5番目に高い）であった。
- イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、特に発生を助長する条件ではない。

（2）ハダニ類

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場での発生圃場率は平年よりやや高かった。発生量は平年よりやや少なかった。

イ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

(3) アブラムシ類

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月1～5半旬の県予察圃場（赤磐市）の黄色水盤への飛来数は340頭で、平年（270頭）よりやや多かった。

イ. 6月24～25日の巡回調査によると、一般圃場でのアブラムシ類の発生圃場率は平年よりやや低く、発生量は平年よりやや少なかった。

ウ. 6月25日の季節予報によると、7月の気温は平年より高く、降水量は平年並とされており、発生をやや助長する条件である。

この情報は、農林水産総合センターホームページでも公開しています。

アドレスは、 http://www1.pref.okayama.jp/soshiki/kakubu.html?sec_sec1=22

病虫害発生予察情報テレホンサービス

岡山県病虫害防除所では、主要病虫害の発生状況や防除に関する情報を迅速にお知らせするために、テレホンサービスを実施しております。気軽にご利用ください。
--

電話：086-955-2224
